

## 不活化ポリオワクチン(IPV)接種のすすめ(昭和50年から52年生まれの方へ)

### 1. ポリオについて

ポリオ(急性灰白髄炎)は、「小児麻痺」と呼ばれ、日本では1960年代前半まで流行を繰り返していました。予防接種の効果により1980年(昭和55年)を最後に野生株ポリオウイルスによる麻痺患者の発生はなくなり、世界保健機構(WHO)は2000年に日本を含む西太平洋地域のポリオ根絶を宣言しました。しかし、現在も南西アジアやアフリカ諸国の国々では野生ポリオウイルスによる発症がみられ、これらの地域からの感染の可能性も考慮しておく必要があります。

ポリオはポリオウイルスが人の口の中に入り、腸内で増えることで感染します。増えたウイルスは便中に排泄され、その便を介してさらに感染が広がります。成人が感染することもあります。乳幼児がかかることが多い病気です。ただし、昭和50年から52年生まれの方は後述の通り注意が必要です。

ポリオウイルスに感染してもほとんどの場合は症状が出ず、知らない間に終生免疫が得られます。しかし、ウイルスが血液を介して脳・脊髄の一部に入り込み、まれに麻痺を引き起こすことがあります。

ポリオウイルスに感染すると100人中5~10人はかぜ様の症状があり、発熱、頭痛、嘔吐があらわれます。また、感染した人の中で、約1000人~2000人中、1人の割合で手足の麻痺を引き起こします。一部の人はその麻痺が永久に残り、麻痺症状が進行した場合、呼吸困難により死亡することもあります。

### 2. 昭和50年から52年生まれの方へ

乳児期に生ポリオワクチンを2回経口接種しているはずですが、ご自身の母子手帳をご確認ください。母子手帳で確認できない場合は、採血しポリオの抗体を持っているか確認することをお勧めします。2回接種していない場合は、IPVの接種が必要です。また、2回接種していたとしても、これらの年に生まれた方に接種したポリオワクチンは抗体の獲得率が悪いことから、厚生労働省は、ポリオ流行地域へ渡航する際にIPVの接種をすることが望ましいとしています。